

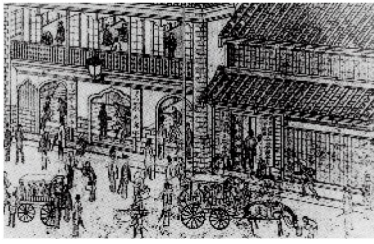
# 駅馬車の馬の供養碑 延命院の馬頭尊碑

宇都宮伝統文化連絡協議会員 柏村 祐司

本郷町通りと県庁前通りが交差する東南に延命院がある。山門をくぐると正面に地藏堂があり、その手前左側に木立に囲まれて「馬頭尊」と刻まれた石碑がある。普通、馬頭尊石碑は、馬の供養のために建てられたものである。馬を農耕に使用した農村であるならば、不思議と思わないが、街中にある馬頭尊碑にはどうしてと疑問に思ってしまう。

馬頭尊碑は、大谷石の台座に立つもので、高さ二一〇センチ、最大幅八五センチ程の立派なものである。

正面に「馬頭尊」、右側面



伝馬町の手塚本舎銅版画  
「市制百周年記念 写真でつづる宇都宮百年」より

に「宇都宮 東京間 往復馬車 発起世話人 手塚本舎社主 手塚五郎平 以下社員・世話人等九人」の名が、裏面には「明治十四年六月十七日」と刻まれている。このことから馬頭尊碑は、明治初期宇都宮・東京間の駅馬車として働いて死んだ馬の供養碑として建てられたものであることがわかる。

ところで、宇都宮・東京間の駅馬車であるが、「東京・宇都宮間馬車会社」が設立されたのは 明治五(一八七二)年で、同年一〇月八日に一般旅客業の営業が開始され、一カ月遅れた二月二日に荷物運送も開始された。区間は東京の千住・宇都宮間で、宇都宮の発着場は、伝馬町の手塚本舎であった。

東京・宇都宮間馬車会社が設けられた背景には、明治三(一八七〇)年に新しく郵便制度が制定され、駅馬車が一般貨物の輸送に付き、郵便物の輸送も手がけることが出来るようになったこと、および時の外務大臣陸奥宗光の要望で、東

北地方の交通の利便性を高めること等があった。ともあれこの駅馬車の開通により、東京・宇都宮間が歩いて二日間かかったのが、十二時間に短縮されたのである。

さて、駅馬車会社を設立した手塚五郎平であるが、手塚家は江戸時代飛脚問屋を営み、代々五郎平を襲名した。ここで取り上げた五郎平は九代目で、旅館業の傍ら駅馬車会社を開業したのである。開業当初は陸奥宗光等が出資経営する東京浅草の千里軒と共同経営であった。というのこの時はまだ利根川に鉄橋がかかっていなかったので宇都宮・中田間は手塚五郎平が、栗橋・東京千住間は千里

軒がそれぞれ営業を分担した。それが明治十三(一八八〇)年二月より千里軒の株を手塚五郎平が譲り受け、全線の営業を開始するようになったのである。延

命院の馬頭尊碑は、手塚五郎平が全線の営業を手掛けるようになってから一年余たって建立されたものである。

当時の駅馬車は、乗客定員が一〇人で、東京千住・宇都宮ともに毎朝七時に出発し夕方七時に到着、所要時間は十二時間である。運賃は当初二両、後に二円九六銭となった。当時の大工手間が、一日一七銭というからかなりの高額であった。そうしたことから駅馬車の利用者は、豪商や県庁の高官が多かったという。

その後、この駅馬車に一大転機が訪れた。明治一七(一八八四)年に東京・宇都宮間に鉄道が開通したのである。速度、乗客定員、乗り心地ともに、駅馬車は太刀打ちできず廃業のやむなきに至った。

延命院の境内に建つ馬頭尊碑は、明治初期に駅馬車があったことを伝える記念碑でもある。



延命院の馬頭尊碑